

相撲が両国に及ぼすインパクトの一考察 A Case Study of The Sumo's Impact on Ryogoku

1K07B008-3
指導教員 主査 原田宗彦先生

新井 萌
副査 寒川恒夫先生

【緒言】

200年余り相撲と両国は共に歴史を歩んできた。世間にも「両国＝相撲」というイメージは比較的定着していると考えられる。しかし、両国に数多くの相撲部屋が存在し、多くの力士が浴衣姿で闊歩するという、非日常世界が広がっているにもかかわらず、両国のまちから相撲のメッカであるという雰囲気は感じられない。中島(2008)は両国のまちづくりの長期的な戦略として、「すべての部屋を両国に集結させ、両国に来ればいつでも相撲情緒が味わえるといった異文化体験の空間を作り出すことを考えてもいいだろう。」と指摘する。まちづくりは興行主・行政・住民が三位一体となっていくものであり、その上で、まちづくりの当事者である両国住民の意識知ことは重要であると考えた。また、相撲と両国住民の関わりを両国住民の意識から調査したものは少ない。大沼(2007)は、プロスポーツのもつ求心力や象徴性、それによって集まった集団が具体的地域の生活の質に何をもたらすかは、不明確なままであると述べている。200年余り続く相撲と両国の関わり合いの歴史から今後の在り方を考える。

【目的】

本研究では、相撲が両国の住民へどのようなインパクトを及ぼしてきたかを時代ごとに明らかにすることを目的とした。また、相撲のまち・両国の今後の発展に向けて、住民の意識を探り、それをもとに、今後の相撲、両国の発展の方向性を検討する。

【方法】

質的研究によって、両国住民のリアルな言葉で相撲が両国住民にどのようなインパクトを与え、何をもたらしてきたかを記述する。特に、本研究では住民の感情や思いに焦点を当てた。半構造化インタビューを用い、必要に応じて話題の展開の中で適宜質問を加えたり、質問の順番を変えたりした。インタビューイーは両国住民の5名である。

【結果・考察】

筆者がインタビュー結果をもとに相撲が両国に及ぼすインパクトとして、

- ① 観戦者を対象とした商売
- ② 相撲部屋を対象とした商売
- ③ 賑わい
- ④ 町並み
- ⑤ 力士との交流
- ⑥ 祭りでの交流
- ⑦ 風景としての力士
- ⑧ 観戦者としての両国住民

の8つに分類した。「戦前」、「蔵前国技館時代」、「若貴フィーバー」、「現在」の時代ごとに両国に及ぼすインパクトを考察した。

また、両国を相撲情緒溢れる観光都市案については5人とも概ね賛成であるとの回答を得た。ただし、相撲と手を組んでまちづくりを行いたいとの考えはあるが、現実問題としては難しいとの見方が大半を占めた。

【考察】

相撲が両国に及ぼすインパクトとして、「大相撲興行のメッカである両国」と「力士が住むまちとしての両国」の2つに分かれるのではないかと考える。「大相撲興行のメッカである両国」とは、国技館があり、年間3場所の興行があることがまちに与えるインパクトである。「力士が住むまちとしての両国」とは、力士が両国で生活していることがまちに与えるインパクトである。相撲興行がまちに及ぼすインパクトとして、「観戦者を対象とした商売」「賑わい」「観戦者としての両国住民」が明らかになった。一方で、相撲部屋があり、力士が住んでいることがまちに及ぼすインパクトとして、「相撲部屋を対象とした商売」「町並み」「力士との交流」「祭りでの交流」「風景としての力士」が明らかになった。もちろんこの2つが複合的に重なり合っているインパクトもあるが大きくはこのように分類されるだろう。

今後の発展に向けて、やはり相撲と両国は手を組むべきであろうと考える。なぜなら、両国という地区を全国的に有名にしたのは相撲であることは間違いないことと200年余りともに歩んできた歴史があるからである。そして、相撲のまち・両国としての発展を住民は望んでいる。ただ、少し排他的な住民気質が両国のさらなる発展の可能性を阻害しているに過ぎない。両国と相撲協会が手を組み、ともに発展していくことを期待する。